



日本文学全集 27



獅子文六

娘と私(全)



河出書房

日本文学全集 27 獅子文六



© 1974

責任編集

武者小路実篤 川端康成
石坂洋次郎 山本健吉
瀬沼茂樹

昭和44年6月20日 初版発行
昭和49年8月20日 7版発行

著者 獅子文六
発行 中島隆之
印刷 和田彰三
装幀 原弘

印刷 刷・東洋印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替いたします
定価はカバー・帯にあります

目次

娘と私
(全)

.....三

年譜

三四九

文学入門

杉森久英 三三七

作家の横顔

飯沢匡 三六三

娘
と
私

亡き静子になさぐ

まえがき

娘が生まれたことから、話さねばならない。

彼女は、パリで妊られ、日本で生まれた。母親は、私の最初の妻である。妊娠八カ月ぐらいいで、日本に着いたのだが、産月が迫っても、普通の産科医に見せるわけにいかない。彼女は、フランス人で、言葉が通じないからである。尤も、英語は話せるから、外人も診察するという、横浜の産科病院に、入院させることになった。

ところが、その院長の英語というのが、怪しいもので、殆んど、妻と話が通じない。院長も閉口して、私も一緒に、通訳として、入院してくれという。産婦人科病院に、たとえ付添いの名目にしろ、男が寝泊りするのには、規則外れなのだが、院長の方から、それを望んだのである。妻は、勿論、その方を喜んだ。

私も、まだ若かったが、産科病院の生活は、生まれて最初であり、異様な経験だった。妻はベッドに横たわり、私は次室で、日本夜具に包まって臥るような生活を、続けた。割りに涼しい夏だったが、女ばかりの世界

に、男一人が紛れ込んだ、窮屈な毎日を送ってるうちに、八日目に、妻が産気づいた。

娘が生まれたのは、大正十四年八月二十六日である。

朝から、天候が悪かったが、午頃から、烈しい暴風雨に変じた。窓を打つ風と雨の音と、周期的に襲ってくる陣痛の声を聞いてると、私の心は、甚だしく動揺した。外国人の陣痛の叫びは、大きいというが、妻もその例に洩れなかった。殊に初産であるから、苦痛と恐怖が、烈しいのであろう。その声を聞いてると、私は、子供なぞ生まれなくてもいいと思い、あんな残酷な苦痛が、妻の体から去ってくれることのみを、念じた。

妻は担架で、分娩室へ運ばれたが、この時だけは、私も通訳として、同行を避けた。だが、いつまでも、妻の悲鳴が耳について、離れなかった。実際、こういう場合の良人というものは、ダラシなく、何の役にも立たず、ウロウロして、夢中で、煙草ばかりフカす外なかった。

だが、再び、担架で病室へ帰ってきた妻は、ケロリとして、静かな、しかし疲れた微笑を浮かべながら、「ポンと出てしまつて、それでお終い！」と、冗談をいった。ナアーンだと、私は一パイ食わされたような気持ちになったが、続いて、看護婦が抱えてきたモノを見ると、ギョッと、胸が迫った。

「当りましたよ。女のお子さんですわ」

と、看護婦が、白布に包まれたモノを、私の前に差し出した。

私は、出産の前から、初めて持つ自分の子が、どうも、女の子のような気がしてならなかった。パリにいる時からして、その予感があった。

だが、今は、男女の別なぞ、問題でなく、ただ「初めて子を持った」という意識で、頭も、胸も一杯だった。私は、一心に「わが子」を覗き込んだ。小さな、小さな存在だった。普通の赤ん坊のように、真ッ赤ではなく、眼が大きく、繊細な手を動かし、口からバラ色の舌を、少し、現わしていた。ジッと見ていると、私の胸の扉が、音立てて開き、私の魂が抜け出して、赤ん坊の中へ入っていくような気持になった。

感動で、私は、立っても、坐ってもいられなかった。産婦は、疲れて眠り出し、看護婦が、赤ん坊の世話をしていたが、私は、病室を飛び出して、世界中の人に、わが子の誕生を告げたい衝動を、感じた。

実際にも、姉と弟のところに、無事出産の電報を打つ必要があった。私は、それを口実に、外へ飛び出した。出産は、午後五時一分だったそうだが、街路へ出た時は、もう、薄暗く、暴風雨の勢いも、弱まっていた。それでも、私はビシヨ濡れになり、桜木町駅まで行って、電報を打った。二通の電報では、もの足りず、親戚と知

人の全部に知らせたい要求を、やっと抑えた。

私は、そのまま、病院へ帰る気がしないで、野毛町の、小さなシナ料理店へ、飛び込んだ。暴風雨で、戸を閉めてる家が多かったが、その家だけ、営業していたのである。私は、全然、空腹を感じなかったが、ただ、酒が飲みたくて、堪らなかった。

ビールやシナ酒を呷りながら、私は、ニヤニヤ笑ったり、独り言を洩らしたり、狂態を演じたことであろう。「子を持った」という感動で、大波に揺られるようで、自制心を失っていた。そのくせ、私は、子供が欲しいなぞと思ったことは、一度もなかった。文学の世界へ入っていくのに、子供なんか、邪魔ッ気だと、思っていた。その上、私は貧乏で、子供を育てていく自信も、なかった。それなのに、初めて父となった喜び——いや、喜びなぞという、単純な感動ではなかったが——は、そんなに、大きかった。

「名前を、つけなければならぬな」

私は、揺れる心を、強いて落ちつけ、考え方を具体的にしようと思つた。

「やはり、麻理がいいかな」

パリにいる時から、もし、女の子が生まれたら、その名はどうかと、考えていたのである。マリー(Marie)という名は、フランスの女性に最も多く、最も平凡な——

日本なら、花子に相当する名である。そういう有り触れた名が、あの国人の血を享けたことのシルシになるし、また、そんな漢字を当てはめれば、日本の名としても通用すると、思っていたのである。そして、その頃から『麻理』という名の外は、全然、頭に浮かばず、男の子の名は、いくら考えても、徒勞だった。

「よし、それに決めた！」

私は、強烈なシナ酒を、飲み干して、イスを立ち上った。おかしなことに、今度は、一刻も早く、病院へ帰りたくなったのである。そんな名にきめたことを、妻に語りたかった。尤も、*Maria* を日本名にする試案は、度度、彼女に語り、彼女も賛成していたのである。

外へ出ると、もう、雨が止んでいた。私は、台風の名残りの中を、駆けるように、衝き進んだ。

*

それから、暫らくして、私は、今の世田谷区代田橋の近くに『わが家』を持った。わが家といっても、勿論、貸家であるが、妻と子と共に、家庭を営むということ、私の人生の最初の経験だった。

その家は、安普請だが、モルタル塗りの外壁と、赤瓦の新築で、その頃から建ち始めた『文化住宅』の一軒だった。屋根裏を入れて、四間しかない小屋だが、パリで貸間住いをしていた私たちには、広過ぎる気さえした。

私は、そこを根城にして、世の中へ出ていく意気込みだった。といって、私には、何一つ、仕事のアテはなく、生活費は、父の遺産の最後であつた地所を売り、その金で居食いをしていた。しかし、私は元気で、頼まれもしない翻訳を、日課のように、毎日続け、そのうち道が開けるだろうということを、なんとなく信じていた。

妻も、元氣だった。見も知らぬ外国へきて、貧しい生活をするのだから、ずいぶん心細い筈ではあるが、彼女は、そんなことに屈する女ではなかった。反対する両親を、強いて説き伏せて、私と結婚し、日本へきた彼女は、相当、深い覚悟を持っていた。

この辺で、妻について語る必要があるかも知れないが、私は、この物語を、彼女が病死し、私と幼い娘が取り残されたところから、筆を起すつもりであるので、詳しく書く気は持っていない。彼女と私が、どうして結ばれ、パリでどんな生活をしていたかというようなことは、また、別の機会に、語りたいと思っている。

彼女は、エレヌと呼び、中部フランスの小さな町の小学校長の娘だった。女学校を出てから、ロンドンへ英語の勉強に行き、その語学の助けで、パリの米国人商社に勤め、自活してうちに、私と知り合つたのである。その時、彼女は二十六歳、私は三十を迎えていた。翌年の冬に、彼女は麻理を妊娠した。

彼女は意志の強い、理性に富んだ、そして極めてジミな女だった。彼女の情熱は、潜在的で、堅実で、道德的でもあった。私と結婚前に、社会主義運動などに加わったのは、その一例であった。体は、骨格型の中肉中背で、容貌も平凡、やや近視である外に、病気を知らず、パリ女の纖弱さと遠い女だった。

貧乏を苦にも、恥にもしない彼女は、貧弱な和洋折衷の生活に、不平なぞコボさなかった。朝は、パンとコーヒーだが、昼と夜は、殆んど和食であっても、文句をいうどころか、味噌汁や刺身を、好物と称した。尤も、彼女は読書好きの女の持ち前で、料理が得意でなく、パリでも、安飯屋で外食ばかりしていた。その点、食いしん坊の私と、まるで反対だった。日に二度の和食をするのは、経済上の必要と、台所をする老婢が、それ以外に知らないからだだったが、米の飯に飢えていた私には、妻が喜んで和食を食べるのを、むしろ幸いとした。

赤ん坊だけは、安物のベッドに臥かしたが、私たちは、敷物の上に布団を展べ、日本夜具に包まった。臥てる枕許に、テーブルの脚が、迫っているような殺風景さも、若い私たちは、気にしなかった。

貧しい家計を助けるために、彼女は、フランス語の出張教授に出ていった。一回二十円ぐらいの報酬でも、その頃は大金であり、生活費の半分ほどは、彼女が稼いで

くれた。尤も、私も、机に向ってばかりもいられず、子供の守りをしたり、風呂水を汲んだり、時には、料理番も勤めた。亭主兼主婦の役回りは、煩雑だったが、生活にハリがあるので、少しも苦にならなかった。

麻理は、健康に育っていった。頭もクリクリ、眼もクリクリした、血色のいい赤ん坊だった。肌の色がトースト色で、髪も、黒褐色で、腫も、青さがなく、混血児の特徴に乏しかったばかりでなく、女の子とさえ、見えなかった。動作が元気で、声立てて笑い、泣声も大きかった。

神田のカトリック教会で、彼女は、洗礼を受けた。代母は、私の友人の妻のフランス人だった。私は、妻が麻理に洗礼を受けさせたいといった時に、少し、不審に思った。なぜと云って、妻は、社会主義に興味を持つくらいで、まず、私と同様な、無神論者の仲間だった。私たちの結婚も、まったく、教会の世話にはならなかった。それなのに、わが子の洗礼は、何の躊躇もなく、受けさせた。私は、日本の親が、七五三の宮詣りをさせるのと、同じ心理かと考えたが、フランス人の血に潜むカトリックの信仰は、もっと根強いものであることを、後に知る機会があった。

麻理の最初の誕生日を迎える頃には、私の仕事も、やっと、芽を吹いてきた。舞台の研究書や、フランス戯曲

の翻訳や、アテもなしに書いて置いたものが、出版される運びになった。そして、世の中が大正から昭和と変つて、円本時代というものが始まり、近代劇全集の翻訳者の一人として、私は、どうやら、生活の道が立つようになった。また、ある劇団の演出者として、その頃の私の本願であつた舞台の仕事に、いそしむこともできた。

麻理は、日増しに、可愛い子になった。三つ、四つ、五つ——その頃の彼女の可愛さを、私は、忘れることができない。肉づきのいい、表情のイキイキした、見るから、健康そうな、快活な子供だった。元氣過ぎて、私に跳びついたハズミに、私の前歯の継続歯を折ってしまったこともあつた。そして、彼女は、その頃の日本の洋装としては、最も可愛げなものを、着せられていた。

妻は、料理下手ではあつたが、裁縫は好きだった。自分のドレスは、パリでつくつたものを、いつまでも着ていたが、麻理の服は、一切、わが手で新調した。フランス婦人雑誌などに出てゐる、子供服の型を、私にも相談して、あれこれと選び、ミシンの音を立てた。白セルのツ・ピースで、襟に細い縁取りのように、あり合わせの黒い毛皮を縫い込んだ服などは、まず、妻の傑作だったろう。その頃の女や子供の洋装は、非常に幼稚だったから、妻が、その白い服を着た麻理を連れて歩くと、人が眼を欲てた。

麻理は、近所の子供と遊ぶようになり、妻の日本語より、遙かに上手になった。妻も、最初はカタコトの日本語で、わが子と喋っていたが、麻理が三ツぐらいになると、断然、フランス語の行儀のいい言葉を、教え始めた。「お母さん、どうぞ……と、いいなさい！」

容赦なく、麻理は、言葉使いを直された。回らない舌ながら、じきに、彼女は、正しいフランス語を喋るようになった。私は、自分のフランス語の発音の悪さを知つてゐるから、彼女に伝染しないためにも、なるべく、日本語で話した。そのために、彼女は、日仏語ともに上達した。

麻理が、言葉の外に、上達したのは、キスであつた。『おやすみなさい』をいって、寢床につく時、何か貰つて嬉しい時、彼女が両親の頬にキスする習慣は、妻が教えたにちがいないが、口で教えただけでは、軽い、自然な、親子間のキスは、習得されないだろう。結局、母親の血をひいてゐるからと、解釈する外はないが、彼女のキスは、不思議と上手で、微笑まずにはいられない軽い音と、感触を、私の頬に与えた。

私たちの家庭は、まず、幸福といえた。無論、夫婦喧嘩がないわけでもなく、その口争いは、いつもフランス語でやるから、語学的に私の敗北に終り、癪癪を起して、物を投げるようなこともあつたけれど、動機は、

他愛もないことだった。喧嘩の後はすぐ仲が直った。

一つには、私の翻訳の仕事の収入が殖え、時には、小旅行をしたり、家具を買い入れたりするように、家計が順調になったからであらう。妻のフランス語教授の収入も、家計に繰り入れず、彼女の小遣錢に回すことになった。また、妻もフランスの女の友人が殖え、最初ほど、社交の孤独を感じないで済んだ。

しかし、その当時の私が、果して、どれだけ、よい良人で、よい父親であったか、疑問である。私は、あまり、女遊びなどしなかったが、友人と酒を飲んで、晩く帰るようなことは、度々だった。そんなことよりも、妻にとって、最も物足りなかったらうと思うのは、私が、まだ、人の父であり、人の良人であるに相應しい、人間的成長を、遂げていなかったことだらう。今から考えると、私は、まだ、まったくコドモであった。フランスの同年輩の男と比べたら、考え方でも、態度でも、ひどく、子供臭いにちがひなかった。私は、自分自身のことを考えるのが、精々の男であり、妻や娘に対する愛情と、自分の情熱とを、整理したり、按配したりすることも、知らぬ男だった。

私に比べれば、妻は、成熟した一人の女であり、人生も、私より知っていた。年は四つ下でも、彼女は、姉さん女房であつた。その上、外国人であり、私たちの家

庭生活は、よほど、世間とちがつていたと思われる。

だが、麻理が、算え年六つの新年を迎えた時に、不測の災いが起つた。妻が、発病したのである。

＊

妻は、心臓の持病が昂じ、それに、神経衰弱が加わつたといわれ、私には、彼女がムリして、日本生活に融け込もうとした結果とも思われ、友人のフランス婦人が経営するホテルに、暫らく静養させたりしたが、経過は、捗々しくなかった。

その年の秋に、私は、医師とも相談の結果、彼女を連れて、フランスに行くことにした。彼女の両親が住んでる所は、山間の静かな町であり、療養生活には、好適の場所であつた。

しかし、麻理をどうするか。彼女は、長途の旅行に伴するには、あまりに小さく、且つ、子供の養育は、病人にとつて、過重な負担である。といって、私たちの留守の間、幼い者を、安心して預けられる家が、ある筈もなかった。

幸い、その話を聞いて、朝鮮にいた姉夫婦が、進んで、麻理を引き受けると、いつてくれた。姉夫婦は、子供がなく、東京へ出てくると、麻理を、よく可愛がつた。混血児として、親戚間の妙な視線を浴びていた麻理も、姉は、唯一の姪として、義兄は、外国生活の長い男

で、偏見がなく、二人から愛されていた。

私は、麻理の手を曳き、平壤までの長い旅をした時の寂しさを、今もって、忘れることができない。五年間、好調に進んだ私たちの家庭生活が、突然、破壊された悲しみを、その旅に出て、初めて痛感した。そして、子供を置いて帰れば、病妻を連れて、更に長い旅が、私を待っている。不完全な父親であり、良人であった私は、意気地もなく、この不幸に打ちのめされ、ともすると、感傷的になった。

姉夫婦の愛情は、信用しているが、子供を残してくることに、堪えなかった。明日は出発という日に、私は、なるべく、麻理の側にいない方がいいと思ひ、平壤の郊外を独り歩いたが、晴れ渡った寒い空から、カラカラと井戸釣瓶の音のような、鶴の啼き声が聞えた。二羽の鶴が、非常に高い空を、円舞していた。その声ほど、悲しい声を、私は生涯のうちで、聞いたことはなかった。

ありがたいことに、麻理は、別れる時にも、快活だった。母と別れる時も、彼女は、不思議といつていいほど、無関心だった。それを、私は、どれだけ感謝したか、知れなかった。

*

秋が深くなる頃に、私は、病妻と共に、フランス船ポルトス号に、乗り込んだ。マルセーユへ着くと、彼女の

父が、埠頭へ出迎えていた。そして、月の明るい夜更けに、山国の小駅に降り、彼女の生家に入った。

暫らく、そこに滞在してから、私は、パリに出た。私は、パリの演劇を観て置かねばならなかったし、妻の実家に長く厄介になることは、避けねばならなかった。

数年振りで、私は、安ホテルの独身生活を味わい、時、田舎の病妻を見舞った。そのうちに、日本から、意外な手紙が届いた。姉の良人が肺結核に罹って、当分、別府で静養することになった、というのである。勿論、麻理も一緒に連れていくが、彼女は、非常に元気で、姉夫婦によく懐いているから、安心するようにと、書き添えてあった。

その手紙に、私は、やや不安を感じたが、じきに、忘れてしまった。久振りのパリの学生的生活が、私をノンキにさせていた。日本にいれば、一家の主人だが、パリでは、外国の一青年に過ぎない。事実、私は、まだ若かった。三十代は、大きな子供のようなものである。父の自覚や、良人の自覚も、ほんとには、備わっていない。自分の家庭生活に降りかかった不幸のことなど忘れ、日本へ帰ってから試みようとする仕事の野心に、燃え立っていた。

半年余を、パリで送つてうちに、滞在費も乏しくなってきたが、妻の容態は、快方に向わなかった。私は、

妻の両親とも相談して、一まず、日本へ帰ることにした。

ちようど、道連れがあつて、帰路は、シベリア經由にした。そして、二週後に、新緑の美しい九州の山々を見たが、私は、すぐ東京に帰らず、別府にいる姉夫婦を見舞い、わが子に会いに行くことにした。日本の空気を吸うと同時に、未完成な父親も、少しは、自覚を深めたのであらう。

別府の貸別荘を訪ねると、麻理は、ハシカで臥ていた。

「パパ、お帰んなさい!」

純粹な日本の子供と、少しも変らぬ言葉で、彼女が、病床から叫んだ。途端に、私の胸が、掻き毟られるようになり、涙が止まらず、彼女の頭を撫ぜること以外に、何もできなかった。彼女の出産の時に感じたような、烈しい感情が、再び、爆発したのである。

数日間、別府に滞在している間に、義兄がかなり重態であることと、そのために、姉が麻理を預かることを、これ以上、希望しないことを、私は知った。

私は、ハタと当惑した。フランスへ行く時に、家を畳み、家具も、伯母おばの家に預けてある始末で、麻理を東京へ連れ帰っても、入るべき家もないのである。そして、長途の疲れで、私自身も、クタクタに、氣力を失つてい

た。

しかし、そういわれれば、麻理を連れて帰る外はない。麻理は、わが子なのだ。誰にも世話を頼むべきではない――

折りよく、麻理のハシカは本症でなく、水痘であるとわかったので、予後を心配する必要もないと思つて、私は、彼女を連れて東京へ帰った。

私は、とりあえず、中野の伯母の家に仮住いを定めた。そして、娘と私との生活が始まった。

そこから、私は、この物語を始めようと、思うのである。

一

私が借りた伯母の家は、東中野の駅から、そう遠くない所にあつた。彼女は、老末亡人であり、子供たちは、皆、家を成してゐるので、一人住いには広過ぎる家屋を、私に貸すことになつたのである。伯母は二階に住み、私たちは、階下に住んだ。洋風擬いの八畳、茶の間の八畳、寢室の六畳、それに、女中部屋との四間が、私たちの住居となつた。台所は共用だが、伯母は、殆んど毎日外出して、未亡人の氣樂さを愉しんでゐるので、こういう場合に起りがちな氣まずさは、なかった。

私が、伯母の家へ越してきたのは、心の底で、麻理を

育てることに、彼女の手を貸して貰うことを、予期していたにちがひなかった。さもなくば、氣儘を好む私は、たとえ伯母にせよ、人と同居することなど、思いも寄らなかつた。それ以前から、私は、すでに、女の子を抱えた父親として、苦い経験を重ねていた。女の子を育てるには、女の子が必要なのである。父親が、いくら努めても、手の届かない、眼の届かない盲点が、どれだけ多いことか。そして、見す見す、わが子を、偏つた子供として、育てていくのである。

子供服を、デパートへいって、麻理に買ってやることは、私にもできる。ガラや形の選択は、私も、世間の母親に、負けないだろう。しかし、それが、どれだけ暖かい、モチがいいか、他の服との釣合いはどうか、というようなことは、私にはわからない。時には、大変小さな服を、買ってきたりする。

食べ物なども、そうである。欲するものは、何でも与えると、下痢をする。自家中毒という病気を、麻理は、何回か、繰り返した。今度は、逆に、ひどく制限して、栄養不良にしたり、食いシンボウにならせたりする。頃合いということが、父親にはできない。

それにも優して、心を傷めるのは、母親のない女の子に表われる、一つの荒みである。

ある日、私は、外出先から帰つてくると、近所の空

地で、麻理が近所の男の子たちと、棒切れを持つて、戦さゴツコをしてるのを見た。私は、私の子がオテンバになることを、少しも、惧れない。むしろ、わが子がヒネくれた、暗い女の子であるよりも、率直な乱暴娘といわれる方が、好ましい。それなのに、私は、彼女が棒切れを振り上げて、立ちハダかっている姿を、一瞥見て、ギョツとした。

真ッ赤な顔をし、眼を釣り上げ、泥だらけの手腕を露わにして、叫び声を揚げて、男の子と争つてゐる彼女は、家や親のない子に見られる野性の還元を、アリアリと示していた。まったく、私の知らないわが子、妻のいた頃には、想像もつかなかつた麻理の姿が、そこに、あつた。

——もう一步で、浮浪児だ。

私は、不意に冷水をブツかけられたような気がした。

子供——ことに女の子は、花卉の苗のようなものであり、助木を添えたり、鉢を入れたりしないでも、自然に、育っていくものと、私は信じていた。私自身が、かなり放任的に育ってきたので、それでいいと、信じていた。ところが、ふと見れば、花卉の苗が、雑草に変わった葉や茎を、伸ばしているのだ。

なぜ、そんな荒みが、麻理に表われたか。

その理由は、私に、すぐわかつた。女の心と、女の手

が、足りないのである。私は、どこまでも、父であり、男なのである。女になれず、母になれないのである。私の家は、太陽はあっても、水のない世界のようなものである。

妻がいなくても、若い私は、それほど寂しさを感じなかったが、子供から見れば、親が片輪車かたわぐるまになった——車の両輪の一つが外れたという、重大な事実が、起ったのである。そのことを、私は、はじめて、気がついたように思った。

そういう経験が、幾度となくあったので、私は、伯母と同居することを、望んだのである。六十に近い彼女でも、女であり、私の血縁であり、麻理に不足しているものを、多少は、補おぎなってくれはしないかと、期待したのである。

しかし、それは、みごとに裏切られた。伯母は、専制的な良人が死んで、ノビノビと、毎日の愉しみを、追っているところだった。今更、甥の娘の養育など、面倒らしかった。その上、伯母には、麻理と同年の孫があり、その女の子を熱愛していた。伯母としては、無理のないことだが、私の予期は、まったく覆くつがえされた。

いい忘れたが、姉の良人は、私がフランスからの帰途、麻理を連れ帰った年に、別府で、生涯を終った。姉は、朝鮮の住宅を引き払い、東京へ帰って、中野に家を

構かまえた。亡夫は、相当の会社の重役だったから、その死後も、姉の生活は不自由なかったが、彼女の性格は、一変したように見えた。以前には、自分から進んで、麻理の世話を申出た彼女が、打って変って、冷淡になつてきたのである。

その原因は、伯母の場合と、まったく同じだった。姉も、独りになった生活を、愉しみたくなつたのである。姉の亡夫は、伯母のそれとちがって、亭主関白ではなかった。二人は、よく愛し合つた夫婦だった。それでも、女が世帯主になり、生活の自由を握ると、自分の愉しみを、先ず第一に考え始めるらしい。

「済まないことだけれど、あたしは、生まれてから、こんなに気楽に、毎日を送つたことはないよ」

姉は、私にそういったことがあった。彼女は能楽に凝り、芝居見物を愉しみ、不自由のない連中との交際に、日々を送つた。私は、そういう未亡人の心理が、いかに、日本の社会状態を語るように思った。亡夫の追懷を、忘れたのではないが、同時に、良人が死んだために生まれた幸福を感謝しているような未亡人——それは、姉と伯母とに限らないと、思った。古い日本には、そういうことはなかったし、また、将来の未亡人は、もつと大胆に、別な道を歩くだろう。その中間の、明治生まれの女たちが、そういう奇妙な心理——良人の死を悲しむと